

一月総評

立花開

かわきながら

強く

ふるえるたましいが

たてがみのような葉陰にふれる

さいう

愛知県

かわきながら、強く、ふるえる。陰が落ちる際、輪郭は柔らかくなるけれど、その陰にさえ痛みを感じそうな「たましい」。生きることで自身を傷つけるような、溢れ続ける激しさがある。かたちの存在しないもの同士の触れ合う瞬間、先に自分を失うのはどちらなのだろう。

水仙に触れるいつかのわたしたち

藤ほたる

神奈川県

花びらの冷たい湿り気と自身の指の熱い湿り気が混ざる。身体感覺こそ“今、この瞬間”を意識した表現はない。けれど薄い布が被さるように時間の感覚はひとつひとつが淡く、すぐに混ざってしまう。今、過去、未来あらゆる時間の点の「わたし」が集まつた「わたしたち」が水仙に触れる。

もう目には見えないけれど

窓際の日向に犬が寝転んでいる

猫谷圭希

広島県

本当は目に見えるものの方が少ないので、私たちはすぐ理解できるものにばかり依存してしまう。主体は見えなくともそこに在ることを知っている。生前、窓際の日向がお気に入りであった犬は、今もそこにある。「寝転んでいる」という現在進行形の表現に慈愛に満ちた眼差しを感じさせる。

椿落椿一輪未解決事件

水丸

茨城県

椿の落花は自然の摂理の中のもの。しかしこのように、人知れず誰にも見届けられることのない生き死には数多く存在する。「未解決事件」という視点の新しさに椿の命の奥行きが増す。見届けることが前提の認識に、人間が持つ強い観察欲と独占欲が感じられ面白い。漢字表記のみだがしつこくなく、美しい情景が浮かぶ。

きみの針がやさしく突くから

いつまでも泣いていられた

こはくいろ

大阪府

傷つくから泣くのではなく、泣くために傷つきたい。そんな関係は正常ではないけれど、だからこそ甘く、抜け出すことは難しい。「きみ」は主体が離れていかないようにやさしく傷つけ続ける。けれど、「いつまでも泣いていられた」、そこは主体にとつてたつたひとつの居場所だったのかもしれない。

春の昼歩いて地図を買いに行く

にしざわゆうと

福井県

一步外へ出れば私たちはどこへでも行けるのに、どこかへ行くためにあれこれと準備をする。地図という、目的地へ赴くためのツールを手に入れるための外出。意味をほどいていくと面白い。目的の場所へ辿りつくための点をひとつずつ繋いでいく。行程を楽しんでこそその旅。

葬式はするな白梅の香の中

字坊 人造

宮城県

葬儀を擧げることを禁じるという、激しい要求。しかも命令形で言い捨てていて、本人の何か深い事情とその解決など待ってくれない死を思う。葬儀は残される側のためのものなのに、整理がつかないまま心だけ溺れそうな白梅の香りの中に立ち尽くす。

僕の泣き声が蜂の巣からする

白石 孝成

広島県

蜂の巣は中が暗くて入り組んでいて、生き物がひしめき合っている。そこにいる「僕の泣き声」ははたして本当に僕と繋がっているものなのか。僕を真似た全く別の何かではないだろうか。「僕」の存在の在処が危うい。巣の中の暗がりによって、外の光が過剰に眩しく感じられる。明るいほどに闇に隠してしまってるのは増える。

熱爛で

宇宙と

握手できました

山本先生

東京都

酔いが回ってきたとき、身体より魂が膨張するような、この世の摂理のようなものから解放される感覚がある。主体はそのとき宇宙を感じた。なんと大きく捉えたものか、気持ちが大きくなっている様が可愛らしい。「熱爛」という固有名詞を入れたことで、より酒を味わい愉しんでいる姿が浮かぶ。

半熟のすももを撫でる

親指の腹で円周率がはじけた

汐見りら

東京都

熟れた果実は柔らかく、たとえ優しく扱っても傷つけてしまう。すももを撫でたつもりであったが薄い皮は破れてしまった。「円周率がはじけ」という、身体感覚と言葉が混ざり合う瞬間を鮮やかに捉えた。手の中におさまる小さなすももの中に宿っていた永遠を感じた。